

2024年度 連携機関レジデントとして緩和ケア内科にて研修を終えた先生より感想をいただきました。

2024年10-12月で緩和ケア内科にて研修させていただきました。研修を希望したきっかけとして、普段急性期病院で勤務する中で、治療自体はうまくいっていても患者さんの苦痛を取り除いて差し上げる難しさに直面したり、終末期や改善の見込みが乏しい患者さんの診療にあたる際に自分の精神面にも影響してしまう事があり、症状緩和に対する勉強はもちろんですが、緩和医療に向き合う医師としての心の持ちようも学べたらと思い、関連病院への外部研修という形で研修を受け入れて頂きました。

症状緩和という言葉は簡単なように思いますが、痛みに対してオピオイドの選択や鎮痛補助薬の選択1つをとっても、投与経路や副作用、増量の余地なども考慮する必要があり、とても奥が深いことを学びました。また、嘔気や便秘など common な症状についての緩和的アプローチは一般内科にも通じる部分であり、今後の自分の診療に活かせる学びを得ることができました。

また、今回所属させて頂いた緩和ケアチームは主治医からの依頼を受けてチームで介入する形式をとっており、主治医ではなかなか気づきにくい問題点や今後の方針として今考えておかねばいけない点など、第三者の目から患者さんを診る視点の大切さも経験することができました。

短い期間ではありましたが、大変充実した研修となりました。ご指導いただいた全ての皆様、そして、関わらせて頂いた患者様に深く感謝申し上げます。

小林由布子